

修士学位請求論文要旨

「向田邦子の自伝的エッセイと虚構性

——『映画ストーリー』編集者時代について——」

国際日本学研究科 国際日本学専攻 文化・思想研究領域

4911226001

川田 亜弓

向田邦子（一九二九～一九八一）の自伝的エッセイをめぐる議論において指摘される点に、向田の自伝的エッセイは事実即したテクストとして読まれるべきなのか、あるいは、一人称で語られる自伝的エッセイであっても向田のテレビドラマシナリオ等の延長上に置き、語り手である「私」というキャラクターが設定されたフィクショナルなテクストとして読むべきものなのか、という問題がある。向田には書簡や日記等の資料が少ないため、実際の向田を知るための資料のひとつとして多くの自伝的エッセイが参照されてきた。一方で、向田のエッセイには事実と大きく異なる記述が含まれていることも関係者の証言等によって知られている。向田の自伝的エッセイには、事実とフィクションの相反する解釈が共存してきたという特徴がある。本稿では「手袋をさがす」（『PH P増刊』一九七六年七月）及び「青い目脂」（『週刊文春』一九七九年五月）を通じて、これらのテクストが向田本人の体験を忠実に反映したものでどうかについて検証し、自伝的エッセイが向田のイメージを作る上でどういう働きをしているか、について検討を行う。

一章では、上記のような本論文の問題意識について述べ、対象とする二作は、向田がシナリオ作家として立つ以前、具体的には向田が二二歳から九年ほど在籍した雄鶏社の『映画ストーリー』編集者時代について書かれたものとして注目すべきであることを示した。

二章では、まず「手袋をさがす」の構造を整理し、このエッセイが若き日の向田を知るための資料として注目されてきたことを述べた。また、

向田の自伝的エッセイに関しては、多くの読者が、それを向田の生き方を示した叙述と捉え読者が自分のための指針として座右に置くという捉え方をしてきたことを示した。

三章では、実際に「手袋をさがす」を作者の実人生と比較しながら読むことを試みた。まず、エッセイに描かれている朝日新聞の求人広告が一九五二年五月三〇日に掲載されていることに注目し、向田の転職はエッセイに描かれた冬の晩からすぐに決まったものではなく、半年以上の期間を要したものであることを明らかにして、「手袋をさがす」が読者をミスリードする作りになっていることを示した。次に、転職先である雄鶏社の入社試験の実際について、本人直筆の答案を分析した。関係者の証言による向田の好成績の証言に対して、実際の答案は、得意分野のバラスキや設問に対して的確に解答していないなどの苦闘の跡が見えるものであった。続いて、雄鶏社採用後に向田が配属された『映画ストーリー』の発売日を新聞広告等から割り出すことにより、全集等に記載されている入社日「五月二一日」は誤りであり、実際は六月であることを示した。また執筆時の一九七六年は、向田は前年の乳癌摘出手術の副作用等による体調不良を抱えており、テレビドラマ界ではホームドラマの転換期に差し掛かっていた。しかし「手袋をさがす」では、現在の「私」におけるこのような事情は描かれていないことも示した。

四章では、向田のテレビドラマ作劇論である「ホームドラマの嘘」（『女人差し指』文藝春秋、一九八二年）というエッセイを参照し、「手袋を

さがす」がここで論じられている「省略」「誇張」「飛躍」「戯画化」という手法に則ったものであることを、テキストに基いて示した。向田はこれらの手法を「少しぐらいの嘘」とまとめ、このレトリックがホームドラマの冗長さを引き締めるスパイスになっていることを指摘している。

五章では、「手袋をさがす」が、「少しばかりの嘘」をレトリックとして使用した虚構性の高いテキストであることを検討した上で、向田のエッセイを伝記研究の資料として利用する際には、「ホームドラマの嘘」の手法がエッセイにも応用されていることを踏まえることの重要性を提言した。

六章では、「青い目脂」の中で向田が触れている、ファンレターの代作という件について、実際の誌面をもとに『映画ストーリー』の懸賞企画として、向田が「青山道子」名義でジャン・マレエ宛てのファンレターを代作した事実関係を明らかにした。「青い目脂」には、後日譚として、そのファンレターがジャン・マレエに酷評を受けたことが書かれている。本稿では、酷評の理由の一つが、「青山道子」が想定していただろう「ジャン・マレエ出演映画の日本公開年」の間違いにあった可能性を指摘した。これは向田の手になるファンレターの表現力への評価に終始した先行研究の影に隠れて見過ごされてきた点である。しかし第二次大戦中及び戦後すぐの洋画公開状況や日仏映画界の状況などを確認すると、フランスの俳優を怒らせるだけの事実誤認があったと言わざるを得ない。

七章では、「青い目脂」で本件がどのように描かれているかについて検討をした。「青い目脂」は三つの節で出来ており、ジャン・マレエに関しての節には、代作の顛末とその後取材で偶然ジャン・マレエに会った際、本人に「青い目脂」が付いていたというエピソードが書かれている。ここで注目したのは、「青い目脂」の初出である『週刊文春』の編集者の言と、「かごしま近代文学館 向田邦子寄贈資料」の中の、手書き原稿である。編集者はこの「青い目脂」の原稿について、向田が「出来が気に入らないのもう一日だけください」と締め切りを延ばしたと証言しており、そのことを裏付けるような推敲だらけの原稿用紙の中で、ジャン・マレエの苦言とされる台詞部分には修正の跡が見当たらないことがわかる。これは、二十年も経ってエッセイの題材として振り返った際にさえ、この言葉が向田の胸に深く刻まれていたことが見て取れるものである。

八章では、「青い目脂」全体の中で、若き日の向田を描くにあたり、執筆時現在の向田自身を並列させて描いている点について検討した。「青い目脂」は、テレビに出演した向田を自身が語る再帰的な節で締められており、向田はテレビの中の自分も目脂を取る仕草をしていたといい、それは、ジャン・マレエと同じだったと述べている。ここで、本稿前半で言及した「少しぐらいの嘘」の中の「戯画化」が使用されていると考えられる。向田は、執筆期限を過ぎて編集部に断りを入れて再考するにあたり、自身の自虐エピソードを入れることでオチをつくらうとしたのである。

九章では、この「戯画化」と向田の自伝的エッセイにおけるセルフプロデュースの関係について検討した。向田の自伝的エッセイに関しては、事実即したテキストであるという本人も含めた証言と、虚構であるという関係者の証言がある。これらの相反する証言は共に存在しており、だからと言って向田のエッセイを虚構だとも事実だとも決めつけるものではない。これらの証言の交差するところに、向田のエッセイにおけるセルフプロデュースの特徴がある。そしてそのセルフプロデュースを演出するのが「戯画化」という手法なのである。

終章では、本論文で示してきたような、向田の自伝的エッセイの特徴と時代の要請との関係について検討した。向田がエッセイを執筆していた一九七〇年代後半は、ウーマンリブに端を発する第三次女性誌ブームが到来し、向田はそれらの雑誌で「自立した女性文化人」のアイコンとして注目されていた。反面、現実の向田は病気を抱え、テレビドラマの世界でも方向転換を迫られていた。自伝的エッセイを書くにあたり、このギャップを埋める手法として、向田はテレビドラマの作劇法として馴染んだ「少しぐらいの嘘」を取り入れた。「少しぐらいの嘘」は、向田邦子という作家の自伝を、メディアの思惑から作家自身のものへ取り返し、説得力あるものにする方法論だったに違いないのである。向田の伝記的研究における、このようなレトリックの重要性を改めて提示して締めくくりとした。